

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

明治時代の 宣教を今に思う

オリビエ・シエガレ
パリ外国宣教会管区長

1927年のパリ外国宣教会 (MEP) 機関誌68号に次のような文章が載っていた。

「現在私たちに委託されている宣教地に、初めて、本来私たちの会に与えられた使命が全うされた。それは、長崎の教会が邦人司教の指導の下に、邦人司教区となったこと。このことは我々の創立者らが約束していたものだ。彼らは私たちの会憲に純然たるが故に、美しい次の事項を入れていた。『使徒職の精神に満ち、宣教以外に利害を持た

ない会員は、現地に養成された司祭たちが教会の運営を担う時間が熟すれば、彼らに全てを喜んで譲り渡し、そして他の地に行く」

長崎邦人司教区設立八十周年を祝う今年こそ、当時の宣教師の喜びは、長崎の教区民と分かち合いたい。パリ外国宣教会全会員の喜びでもある。

パリ外国宣教会の宣教師が、一番最初に長崎入りしたのは、1863年だ。その後、1927年ま

で、64年ほどは、長崎教会の再出発や復興の時期に、運営を担当させてもらった。この間毎年、最初に教皇代理であったプチジャン神父をはじめ、クザン司教、コンバズ司教の宣教状況の報告がパリ宣教会の本部に送られていたが、これを読むと、まず目立ってくるのは、宣教師たちの、浦上をはじめ、250年以上迫害を耐え忍び、長崎各地に残っていた、キリシタンに対する深い敬意と感動だ。彼らの手紙や報告を通して、この感動は波となってバチカンをはじめ、全世界に広まっていた。

彼らの宣教期間は明治維新に続いた60年間に当たるが、日本歴史の中で大きな転換期だったことは周知のごとく。鎖国を終えて、西洋と出会った日本は、政治の混乱と同時に、産業革命による社会秩序の大変動と急な都市化の時期を迎えていた。当時の宣教師たちの第一の気遣いは、キリシタンたちの教会への復帰と同時に、近代社会に現れたあらゆる悪から彼らを守ることであった。そしてできるだけ早い、邦人の手によって運営される教区の設立であった。その実現までに60年以上の長い時間が必要だった。その間の報告を読む

と印象に残る宣教師の姿勢は、まず揺るぎのない深い信仰だ。故郷を放棄していた彼らは、様々な愛着から解放され、あこがれの天国以外にはこの世の幸せに関心がなかったようだ。不透明の時代に明日はどうなるかわからず、あつちこつちを巡回しながら、全てを神のみ摂理に委ねていた。

祈りに根ざした人だからと言って、決して空想家ではなかった。長崎教区に残っている美しい明治時代の教会を見てもわかるが、彼らは優れた知恵と技術情報を持っていて、それを人々のため、特に迫害で財産を失っていた貧しい人々のために、それを生かそうと思っていた。現代、情報と物の飽和状態の中に生きていて、何事にも感動しにくくなった私たちは、彼らの宣教への情熱は一体どこからきていたのかと不思議に思う。だが当時この情熱に感動し、それを受け入れる人々がいなかったならば、彼らの熱意は挫折に終わっただけかもしれない。

当時、宣教がこれほどの実りに恵まれたのは、聖霊の働きはもちろんだが、何よりも現地の人々の積極的な協力のおかげだった。記録を読むとどれほど献身的に宣教

師たちを助けたかがわかる。自分たちの家を提供したり、同行して道の案内をしたり、小舟に乗せたりして、命がけの協力を惜しまなかった。

邦人教区設立直前の1926年の報告書に、テイリ司教代理が宣教の実りを数字でまとめて伝えている。信者の数は5万2623人、地区共同体は140、教会の建物は120、司祭は28人、そのうち20人ほどの日本人。テイリ師はどうやって神様、また長崎の人々の協力を感謝できるか言葉がな

いと言っている。

今日、私たちは明治時代の宣教師たちのまねができないかもしれない。教会は、ものと情報が溢れている今日、共同体の空洞化、価値観の相対化、社会の格差化などに対して、新しいチャレンジを試みていかなければならない。今日の宣教は守る姿勢から、現代の人々の叫びにこたえ、こころをより大きく開く姿勢に変わらなければならないだろう。明治時代の宣教師の思い出が私たちにとって大きな励みとなり、彼らの情熱が私たちの宣教師を燃えさせたせ、心の目覚めを呼び起こすものとなりますように。



Q & A

「邦人司教区設立

八十周年」



ありがとう！！



Q. 長崎教区は今年(2007年)邦人司教区設立八十周年を迎えたということですが、それ以前は外国の司教さまがおられたのですか。

A. 1927年7月16日、時の教皇ピオ十一世は、長崎教区を邦人司教区とする教皇令を發布され、一週間後の23日、函館教区・仙台の司祭早坂久之助師を長崎教区の司教に任命しました。はじめての日本人司教の誕生です。その頃日本には、教皇レオ十三世の決定によつて4つの司教区がありました。東京首都大司教区・大阪・長崎・函館です。これまで長崎教区はパリ外国宣教会の司教や司祭によつて司牧されていたのですが、1927年長崎教区がはじめて、外国から来られた宣教師たちから自立して、日本人の司教の責任のもとに司牧を進める体制が整ったというわけです。

それから今年で80年経過したのですが、80年というと、一人の人間の一生と大体同じくらいの年月です。

先輩であるパリ外国宣教会によつて、1865年の、いわゆる信徒発見によつて復活した長崎のキリスト教信仰が、自立して、人の一生分を生きてきて、どれほどの成長と成熟を成し遂げたのか、振り返ってみる絶好の機会ではないでしょうか。

Q. パリ外国宣教会が長崎教区の司牧の基礎を築いてくださったということですが、具体的にはどのようなことをされたのでしょうか。

A. 具体的に数えればきりがありませんが、まず第一に挙げねばならないのは、宣教への熱意でしょう。

かれらは宣教師としての使命のため、司祭叙階されて間もなく、二度とふるさとに帰らぬ覚悟で出発したのでした。いわば背水の陣を組み、文字通り退路を断って臨んだ、そのすさまじいばかりの宣教師熱は、その中身は違っても今も受け継がねばならない基本的なことです。

第二は、いま世界文化遺産として、長崎教区の宝のみならず、世界の宝として認められつつある教会堂の建立です。もちろん、教会堂という建物のみならず、この建物を巡って展開されてきた信仰の営みそのものが、評価されているわけです。

教会内外という視点をあえて適用するとすれば、教会外の方々が口をそろえて言われることは「長崎の自然環境とみごとに調和している」ということです。よくキリスト教は西洋から入ってきたものであり、日本のものではないと言われることがあります。しかし、こと長崎に限って言えば、長崎キリスト教となつていくということになります。

財政面からの論調は過度に強調すべきではありませんが、たとえばパリ外国宣教会が建立した大浦天主堂は、長崎の環境と調和し、国の宝つまり国宝となり、そこを訪れる、ほとんどが信徒ではない方々が、こころよく奉納してくださる入場料が、いまま教区を現実支えているのです。それも教区運営の一部という以上の割合に上ります。この点からも、この先輩宣教師たちの功績がいかに偉大であ

るかということが分かります。

信仰の面の検証ということで言えば、宣教師たちの熱意ある司牧の恩恵を受けて育ったわたしたち一人ひとりが、自分の責任で振り返ることではないでしょうか。

主日のミサを大事にすること、かれらをはじめたかどうか文獻的に明確でないものの、長崎特有のものとして定着させていたのだいた年の黙想（いわゆる「まいねん」）の習慣など、どのように受け止め、どのように成熟させてきたか真剣に検証されねばなりません。

Q. パリ外国宣教会の宣教法には教会当局から異端とされた「ヤンセニズム」(厳格主義)に影響されたものがあつたとも言われているようですが…。

A. ヤンセニズムとはオランダの神学者コルネリウス・ヤンセン（1585～1638年）にその源流があるとされる異端の一つです。その行き過ぎた悲観的人間観をめぐって、フランスを中心に全ヨーロッパで激しい論議を呼んだ思想です。

ローマ教皇庁は神学者たちに慎重に検討させ、時の教皇インノセント十世（1653年）がヤンセニズムを公に禁止しました。

その後、政治的思惑なども加わって論争がおさまらず、クレメンス十二世（1713年）がヤンセニズムを再び禁止しました。

その後も二十世紀初頭に至るまで、フランスのみならず全ヨーロッパのカトリック信徒に影響を及ぼしたことは、ピオ十世（1908年）の回勅によって、このヤンセニズムが禁止されていることを見ても分かります。

長崎教区のかつての信仰体質の中に、たとえば、一回のゆるしの秘跡に対して、二回とか三回の聖体拝領しか許されないとか、罪のゆるしという神さまの愛より、地獄と結びつけて、罪の恐ろしさを過度に強調する傾向があつたことなどを耳にすると、多少ともヤンセニズムの影響があつたのではないかと思われまます。また、年の黙想を怠つたり、ミサに長い間来ない人が亡くなったとき、第二墓地とか、ステ墓とか言われる別の所に葬られるということがあつたとも聞きます。しかしいまは、1975年の使徒的勧告「福音宣教」が指し示しているように、宣教師の180度の転換がなされているのです。その精神をシエガレ神父さまが記してくださっています。

教会は、ものと情報が増えている今日、共同体の空洞化、価値観の相対化、社会の格差化などに対して、新しいチャレンジを試みていかなければならない。今日の宣教は守る姿勢から、現代の人々の叫びに答え、こころをより大きく開く姿勢に変わらなければならぬ。いだろう。明治時代の宣教師の思い出が私たちにとって大きな励みとなり、彼らの情熱が私たちの宣教魂を燃えたせ、心の目覚めを呼び起こすものとなりますように。

新しい要理

「共に歩む旅」(7)

第五課 「これを見て

良しとされた」

〔進行係〕(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)
「一人か二人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいますか。」

(誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい)

- ・主よ、私たちはみなあなたを待っています。
- ・この集いにおいでくださり、私たちとともにいてください。

A. 私たちの生活

〔進行係〕

「下の写真を見ましょう。」



〔進行係〕(参加者たちに質問する。)

①上の写真と下の写真を比べて見て、どんな感じを持ちますか。

②あなたは美しい自然を眺めながら、神について考えたことがありますか。逆に破壊された自然を眺めなが

らどんな考えを持ちましたか。お互いの考えを話し合ってみましょう。

B. 神のことは

神はこの世と人間を良いものとして創造されました。

自然の美しさと驚異的な秩序と調和は、そのすべてのものを手ずからつくった神の全能を語っています。自然の中には神の愛が潜んでいます。この世界の美しさは、神が私たちにくださった祝福です。

〔進行係〕

「どなたか創世記1・26・31(天地創造)を読んでくださいませんか。」

・・・聖書を読む・・・

「他の方がもう一度読んでくださいませんか。」

〔進行係〕(参加者たちに質問する。)

①「神が私たちが愛しているということを聖書ではどのように表現していますか。」

②「私たちは子供のとき、どんな自然環境の中で成長したのかお互いに話してみよう。そして今まで心に印象深く残

っている風景についても話し合ってみましょう。」

神は私たちを愛して、自分の似姿として私たちをお造りになりました。そしてご自分の意向に従って、私たちが世界の万物を見守り大切にすることを望まれます。

【進行係】

「どなたか詩編8・1・9（ダビドの歌）を読んでくださいませんか。」

【進行係】

「次の聖書の句を一人ずつ祈るような心で読んでください。」

（同じ句を3度繰り返し読んで、他の人々は沈黙を守ります）

「あなたの指のわざを」（3回）

「人間は何ものなのでしょう」（3回）

「あなたが顧みてくださるとは」（3回）

「御手によって造られたものをすべて」（3回）

「全地に満ちていること（3回）」

【参考聖書】

*創世記 1・1・2、4 天地創造
*詩編 148・1・14

主の御名を賛美せよ
*ヨハネ 1・1・5

み言葉を通して生まれたこの世

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

神は美しいこの世界をつくり、人間に任せられました（創世1・26）。しかし、それは人間が自分勝手な欲望のとおり支配するために与えられたものではありません。神は人間が世界との調和の中で豊かに成長し、ご自分の愛がますます明らかになることを望んでおられます（創世1・28）。

【進行係】（参加者たちに質問する。）

①人々はなぜ美しい自然を破壊していると思いますか。

②環境保護や私たちの近くの自然を生かすために実践できることは何か、また、どのように実行に移すことができるか話し合ってみましょう。

【進行係】

「主の祈り」を捧げながら集いを終わります。

【進行係りの心得】

*母親が、片時も赤ちゃんから目を離さず「よしよし」とうなづくイメージは、神が被造物たる世界に注ぐ視線と態度に重なります。人と人のみならず、人と世界の間におられる神の現存を学ぶことが大切です。

【覚えましょう】

15. 進化論と創造論をどう理解したらよいのでしょうか。

*進化論は科学の真理であり、創造論は信仰の真理であるので、科学の真理と信仰の真理はお互いに違うという理解が必要です。

①聖書は科学の書ではありません。科学の真理は事実に対する探究から語られるものです。科学的な方式で探究する進化論者たちは、現状を観察して、一定の法則を探し出します。そんな科学の真理は、新たな理論ができれば新しく修正されます。半面信仰の真理は存在の意味に関わるもので不変の真理です。

②聖書は信仰の真理を伝えてくれます。創世記1章に出る天地創造の話は、歴史的な事実を記録したのではなく、信仰宣言の意味を持つ創造説話です。創造信仰の核心は、神が全宇宙を創造され、人をすべての被造物の中心にしたという信仰告白にあります。それは世界をありのままに見つめ、そこから神を体験した人々の目で、再び自然を新しく理解し直した記録です。

16. 私たちはなぜ自然を大切にしなければなりませんか。

*神が「よし」とされた世界だからです。自然との一体化は神との一体化につながるものだからです。

万物を創造してから、神はご自分の似姿として男と女を創造し「産めよ、増えよ、地にみちて地を従わせよ」（創世1・28）と言われました。このみ言葉は、自然を破壊したり搾取しても良いという意味ではありません。神がこの世を大切にされるように、私たちも地球を大切に育てなさいという意味です。

「発達障害」を知る (3)

西村良男

準備も出来
たし・・・



そうだ、その
子。きれい
だろう・・・



第二部

エーディーエイチディー
ADHD

注意欠陥多動性障害

自分を制御する力が弱く、
行動に問題が生じる障害

能力がないわけではないのに、いつも宿題を忘れたり、提出物を出さなかったり、人の話を聞かずにおしゃべりしたりする子。そんな子どもに時々出会います。こういう子どもは、自分の能力を十分生かしきれない上、周囲の人からは「困った子だ」と言われがちです。本当は、この本人が一番困っているし悩んでもいるのです。このような子どもたちには、周囲の人の理解と支援が欠かせません。もし、適切な対応がなされなければ、彼等は自信を失い、二次的障害（不登校や引きこもり等）を引き起こすことも予想されます。

ADHDは、注意力・多動性・衝動性を自分でコントロールする力が弱い障害です。本人が怠

けているわけでも能力が劣るわけでもありません。注意力や集中力に欠け（注意欠陥）、じっとしておれなかったり（多動性）、突然何かをしてしまったり（衝動性）するために、集団活動や学習活動がうまくいかないのです。

本人は自分の行動がおかしいことに気づいていませんので、大声で叱られても、なぜ叱られるのかが分らず、叱られたことでパニックになったり落ち込みだりします。

ADHDの子たちの問題となる行動には次のような特徴があります。

① 注意欠陥

- 一つのことに集中できない
- 不注意なミスが多い
- 学習や遊びに集中できない
- 好きなことには非常に集中する
- 課題を仕上げられない
- 学用品をよく壊し、失くす
- 他の事に簡単に気を取られる

る

- 約束ごとをすっかり忘れる

② 多動性

- じっとしてられない
- 見る物や音に敏感に反応
- 手足をもじもじ動かす
- 席を離れて立ち歩く
- 高い所に上りたがる
- よく走り回る
- 静かに遊べない
- おしゃべりが止められない

③ 衝動性

- 後先を考えずに行動してしまう
- う
- 突然しゃべりだす
- 順番を待てない
- 内緒の話をしゃべってしまう
- 質問の途中で答えてしまう
- 友人とのトラブルが多い

このような特徴はADHDのどの子にも同じように表れるものではありません。程度や表れ方にも個人差があります。

例1 落ち着けないユウくん

4年生のユウくんは幼児期から、体を動かすことが大好きな活発な子です。落ち着きがなく、静かに話を聞くことが苦手です。授業中について立ち歩きます。持ち物への愛着心が薄く、学用品を壊したり失くしたりします。鉛筆や消しゴムは、朝、そろえて入れてあげても、帰った時には、筆箱の中は空っぽ状態です。

「ユウくんへの対応」

ADHDの子どもは、じっとしていることが苦手です。見える物や聞えてくる音に、つい、体が反応してしまいます。窓の外や動く物や黒板横の掲示物、級友の持ち物にも気を取られます。そこで、教室では他の子どもたちも、机の上には必要なものだけ置かせます。学習環境をシンプルにすることは家でも同じです。勉強部屋も机も余分な飾りはなくしてシンプルにします。

ユウくんは、授業中に立ち歩いたら叱られる理由が分りません。みんなが迷惑していることに気づいていないのです。ユウくんにそのことをじっくり説明して理解させる必要があります。その上で、先生がタイミングを見計らって、じっと座っているのが苦手なユウくんは、用紙配布などの用事や黒板を使った課題などをさせると、ユウくんは助かります。

ユウくんは活動的な子ですから、体を思い切り動かす時間を設けてやると多動性を発散でき、その後は落ち着く時間も長くなります。

物を失くすのは整理整頓が苦手なためです。筆箱の仕切りをはっきりさせて、そこに、エンピツ・消しゴム・色ペンなどと明記し、使った後は名前の位置にきちんと戻すことを繰り返し訓練して身につけさせます。これには親や先生の根気強さと共に、周りの子どもたちの理解と支援が必要です。

ADHDを持つ子どもたちは、

《参考図書等》

努力すれば誰でもできそうなことが、なかなかうまくできません。この子どもたちには「失敗」

・シリーズ「発達と障害を考える本」①④(ミネルバ書房)

はつきりした見えないので、障害を理解していないと、子どもの自尊心を傷つけるような言葉を投げつけてしまうことにもなりかねません。前回の「LD」

・「のび太・ジャイアン症候群」(司馬英理子・主婦の友社)

の部でも述べましたが、「失敗」の数を数えるのではなく、成功をほめる回数を増やす」ことで、子どもに自信と達成感を味わわせることが何より大切です。これは、ADHDを持つ子どもに限らず、どの子どもに対しても当てはまる「子育ての基本」中の基本です。

2」

《サイト》

・東京都教育委員会HP

《相談機関》

・教育委員会の教育センター
・心の教育総合支援センター

(長崎大学)

発達障害があるかどうかは軽々しく判断せず、相談機関や医療機関などに相談することが大切です。また、問題行動の場面ばかりが出てきますが、発達障害の子がいつも問題行動をおこしているわけではありません。

このシリーズでは、発達障害の特徴的なさわりの部分だけを紹介します。もっと詳しく知りたい方は、書店で関係図書を求められるか、インターネットで検索して調べてみてください。

聖書

豆知識



黙示録について・・・

Q.

今年は典礼暦年から言うところのC年ですが、復活節の主日の御ミサにあずかっていて、ひとつ気付いたことがあります。それは、復活節第二主日から第六主日にかけて、第二朗読の時に、いつも「ヨハネの黙示」が読まれていたことです。実を言うと、「ヨハネの黙示」を読むことに抵抗を感じます。それは、読んでもよく分からないことがたくさんあるからです。内容も然ることながら、特に、意味の判らない現象や、数字や、色や、動物などが記されていて、一体それらをどのように解釈したらいいのか明確ではありません。そこでまず、「黙示」とは如何なるものなのか教えて下さい。また、そうしたしるしが何を意味しているのか説明して下さい。

A.

言われる通り、ヨハネの黙示を読んでもみると、書かれている内容が何か謎めいていて、また神秘的でもあり、一体何を語ろうとしているのかよく解らないような印象を誰もが受けることでしょう。そこです。ヨハネの黙示がどのような書なのかということから説明しなければならぬいかもしれません。私たちは、この書を一般に「黙示文学」と呼び、他の書から区別しています。

これが、どのような種類の文学に属するのか、その文学的な様式を考えた時に、「文学類型」あるいは「文学的ジャンル」と呼ばれる、「黙示」という文学様式(類型)を持つていることなのです。では、黙示文学とは、どのような様式なのかというところが、さらに問われることとなります。簡単に述べるならば、ユダヤ文学(後にキリスト教文学)の一種式で、書いて字の如く、「隠されている秘密が明らかにされ、それを書き記している書」ということです。その中で取り扱っている内容は、預言書と同様に未来のことについてですが、預言書は預言者たちの言葉によって未来のことが記されています。それに比べて、黙示文学は、単に言葉だけではなく、未来に起こるであろうことを具体的なしるしをもって記している点が大きな違いであると言えるでしょう。旧約にも多くの預言書があることは、誰もがよく知っています。しかしそれらとは趣を異にし、多くの神秘的な事例(しるし)をもって書かれているダニエル書が黙示文学に属しています。だからこのように、預言書のように終末的な出来事を述べている点では共通してはいるものの、さらに神秘的な表象(シンボリズム)を用いながら書かれているところが、黙示文学の特異性であると言えるでしょう。それでは、ヨハネの黙示に見られる象徴的なしるしを考えてみましょう。しるしと一言で言っても単一のしるしではなく、複数の種類のしるしが描写されていることが読んでみると明らかに判ります。しかもそれらは、一様に解釈され得ないほど多様性に満ちています。従って、それぞれ

の種類に分けて、見て行く必要があります。しかし正直に言って、判りやすく説明できるかどうかはわかりません。何故ならば、神秘的なシンボルを説明していくわけですから難しく当然なのかもしれないからです。その点をご理解いただいた上で、説明していくことにします。

まず第一に、「宇宙的シンボル」と呼ぶことの出来る、宇宙を描写する天体的なしるしですが、黙示書の実にいたるところに見られます。例えば、「太陽」(1・16、6・12、7・2、8・12など)、「月」(6・12、8・12、9・5、11・2など)、「天」(3・12、4・1、5・3など多数)、「星」(1・16、2・1、3・1など)などが具体例です。これらは単に、通常それらに対して私たちが思い描く宇宙的な概念や機能を描写しているのではなく、それらを持つイメージや機能を基礎にして、神とキリストに言及しながら、新しい意味を与えているのです。太陽は「義なる神の裁きの正しさ」であり、天は「神の超越性が存在するところ」であるし、また、星は「創造的業に結ばれる神の超越性の象徴」のようです。さらに、これまでの人間の歴史の中で働きかけられた神の積極的な介入が、宇宙的シンボルを用いた破壊的な記述(現宇宙の秩序を脅かすかのように思われる印象を与えながら)と共に描かれているところに、ヨハネの黙示の特徴がよく表れています(6・12、13、8・12)。それは、神は歴史において、積極的に変化をもたらさうとされたことを読者である私たちに強く印象付けているのです。(次号に続く)

(湯浅 俊治)



「ペトロ、これがあなたの洗礼名です」



1月27日、父が「ペトロ」という洗礼名で中田輝次神父様（馬込教会主任）によって、病院で洗礼を授けていただきました。それは「頑固な岩（ペトロ）」から「信じる岩（ペトロ）」に変えられた日でした。

この洗礼を受けるまでには、いろいろなことがありました。

とっても元気だった父が急に痩せ始めたので、心配していたら、1月12日に、胃に大きな癌が見つかりました。そこで、父は1月15日から検査入院することになったのです。その日の朝、私は車で迎えに家まで行きました。すると、父が「お前に話がある」と言い、自分の死を覚悟していたのでしょうか、預金のこと、遺産分配のこと、葬儀に呼ぶ人のことを私に話し始めたのです。そこで、私は思い切って、「お父さん、葬儀は教会でしない」と言ってみました。すると、父は「いいよ。お前には一番世話になったし」と答えたのです。私は母を呼んできて、父の意志をもう一度確かめました。父は「神父さんにも、お世話になったし、頼むよ」と続けて言ったのです。

父に洗礼を授けてくださった中田神父様との出会いも不思議な導きでした。私は教会嫌い、神父嫌いの父に何とかして、教会に行くチャンス、神父様と会わせるチャンスがないかと考えていました。ちょうど良い機会が訪れました。それは、私が仕事上お世話になっている中田神父様が太田尾教会にいらした時、仕事のこと、神父様に会いに行くことになったのです。そこで、私は父が造船の仕事で大島に行ったことがあると話していたことを思い出し、父を誘ってみました。すると、父は「大島か、行ってみたいな」と言ったのです。こうして、気さくな中田神父様との出会いによって、神父嫌いの父の心がすっかり変えられました。また、教会の中に入って色々説明を聞いた後、父は一人で祭壇の方へ進み出て、左のご像、中央の聖櫃、右のご像に、深々とおじぎをしたのです。

中田神父様が伊王島に転動されてからも、父と一緒に訪ねる機会が与えられ、神父様と再会できたことをとても喜んでいました。それから後も、父は度々私に「先生は元気かね」と尋ねるので「元気よ、お父さんにもよろしくって!」と答えると、顔中に喜びを表わしていました。

洗礼の前日、父は病院を移ったため、とても疲れていて声も出せない状態でした。そして、当日。父がどのような状態かと案じながら、神父様と二人で病室に入ると、父は神父様の姿を見るなり手を差し延べ、神父様の手を握って「ありがとう、ありがとう」と言って喜んだのです。私は「良かったね。お父さん、神父様を待っていたんだよね」と言いながら、涙が出てきました。そして、「お父さん、神さまの子どもとなる祈りをさせていただこうね」と言って、神父様より洗礼を授けていただきました。この祈りの間「こんな嬉しいことがあるもんか、こんな嬉しいことがあるもんか」と何度もくり返して、この喜びを声に出していました。

私が高校三年のとき、洗礼を受けたいと言ったら、「墓が違うようになるから許さん」と、それはものすごい剣幕で怒られ、反対されました。結局私は、両親に黙って19才のクリスマス・イヴに洗礼を受けました。あの時から、両親に臨終洗礼の恵みがいただけるようにと、切に祈っていただけに、こうして、まだ意識がはっきりしている時に、洗礼を授けていただけたことは、本当に大きな喜びでした。そして、あのとき、あんなに頑固に反対していた父が、こんなに変えられたなんて・・・と、神さまのなさり方を感謝せずにはいられませんでした。

2月9日には「病者の塗油」を授けていただき、この時も、父は自分から手を組んで祈っていました。

3月21日に意識が無くなった時、もう一度「病者の塗油」を授けていただくと、次の日の朝には意識が戻り、家族、親族との「最後の時」を過ごしました。そして、27日12時5分に天に召されました。それは洗礼を受けてちょうど2ヶ月目。胃に悪性リンパ腫という血液の癌ができていたにも拘らず、痛みや苦しみもなく、とても平和な最期を迎えることができました。

お通夜と葬儀ミサは、父の望み通りに教会でしていただきました。親戚は全部が非キリスト者でしたが、教会でこのようにきれいな葬儀をしていただいたことに、感動し、感謝していました。

そして、私の心には“求めなさい。そうすれば、与えられる”と言われたイエスさまの言葉が力強く、大きく響いていました。

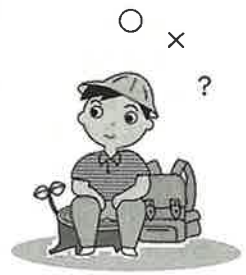
（援助マリア会 下釜博美）





教区評議会

一年を省みて



去る6月3日、教区評議会の、厳密には第二回目だが、実質第一回目の総会が開催された。開催に当たって、これまでの信徒使徒職の組織と大きく変わっていることを印象付けるためにも、単なるシャシヤン総会にしない工夫を考えた。

それが地区別のグループ・ミーティングと、それを基としての、シンポジウム形式による分かち合いである。

このミーティングとシンポジウムに、約2時間30分の時間を割いたが、それなりのインパクトがあったと思っ

た以下二点にしばって、その内容について記してみたい。

一、代表者について

ほとんどの参加者が信徒であったので、これまでの信徒使徒職組織となんら変わらないのではないかと、という意見も出された。もっと司祭方の出席をうながすべきである。少なくとも地区評議会会長である地区長神父さまはぜひ出席すべきである。

しかし、総会の日取りを決めるに当たっては、どうしても日曜日に組まざるを得ず、そうなるに神父さま方は動きにくい。せめて近くの神父さま方だけでも参加していただければありがたい。しかし、神父さま方がほんとに参加したら、こんなに本音で

話せるのかなど意見が出された。

この代表者参加のことは、とても重要なことと思う。そもそも評議会組織にしたのは、司祭・修道者・信徒が同じ土俵に上って、三位一体体制で、教区活動の活性化を図るためであった。

信徒使徒職の時代は、代表者が総会に与っても、それは一団体の代表であるため、小教区あるいは地区に帰っても、全体の代表者として振舞うことは組織上は無理があった。

しかし、今回評議会組織になったからには、代表者は小教区、各地区全体の代表権を持って参加するのである。

司祭であろうと、修道者であろうと、信徒であろうと、代表者は代表者なのである。

もし、信徒が、司祭でないで代表の資格がないなどと考えるとすれば、それはかつての信徒使徒職時代に逆戻りすることになり「信徒の時代」と言われることは、単なる飾りことばに過ぎないということになってしまう。

問題は小教区現場、地区現場に帰って、教区評議会総会に参加した代表者が、どのように待遇されるかが今後の課題となり、そのことよってこの見直された組織が生きているのか死ぬのかも決まってくる。

二、教区の方針について

周知のとおり、高見三明大司教さまは「参加し、交わり、宣教する教区づくり」という壮大なビジョンを掲げておられる。そして、これを、昨年ほどに年間テーマとして、ザビエル生誕五〇〇周年などの行事に反映させるとともに、根本対策としての小共同体づくり運動を提唱しておられる。このように一つの基本理念があり、その理念をじっくりと具体的プランに落とし込んでいく活動のやり方は、長崎教区にはまだなじまないかと考えていた。

しかし、今度の総会の話し合いに接して、それは杞憂に過ぎないことを悟った。

ある地区では、教区方針をどのように生かすか、常に語り合っているのに、総会の席でまた話しをさせるのかなどの不満も表明された。

信徒使徒職時代の積み重ねが、いま生きていて、組織的に動く訓練ができつつあるのだという確信を得た次第である。

その他、さまざまな問題提起がなされたが、詳細については省略する。

発足年度の調整の都合で、任期は一年に過ぎなかったが、多くのことを勉強させていただいた。

司祭団の各地区の集まり（コンベンツス）を要とする司祭団のつながりが教区の大動脈であるとするれば、地区評議会を要とする評議会組織は大静脈と言えるであろう。この二本の血管が確かな脈拍を刻み、教区が社会に向かって活き活きはつらつと進出することを祈っている。

若林 潔（前教区評議会議長）

長崎巡礼センター



「長崎巡礼」をしませんか

【信仰の歴史が世界遺産】

今年、長崎の教会群が、ユネスコの世界遺産登録候補となりました。しかし、「なぜ、あんな小さな教会が？」という人もいます。そんな人に、この最果ての地の信仰が、類い稀な歴史の遺産として評価されたことを話すと納得してくれます。

1550年、フランシスコ・ザビエルが平戸に上陸して、長崎での450年のキリスト教の歴史が始まります。長崎は、日本各地のキリシタンが移り住んだ町ができて教会堂が立ち並ぶ日本のキリスト教と中心となりました。やがて、ヨーロッパの侵出に脅威を覚えた徳川幕府によってキリスト教は禁じられ、多くの人が殉教します。それでも、長崎の信徒は、250年間、密かに信仰を守り続け、幕末、大浦天主堂で神父との再会と信仰復活を果たしました。しかし、すぐ「崩れ（キリシタン大量検挙事件）」という受難を受けます。そして1873年に明治政府がキリスト教禁制の高札を撤去して、ようやく公に信仰できるようになりました。

長崎の教会堂はいずれも、この歴史を担ってきた信徒の子孫によって建てられています。

【長崎巡礼をすると・・・】

世界に衝撃をあたえた信仰の歴史を実感し、心に何かを得ることができなのが、「長崎巡礼」です。長崎巡礼には、長崎キリシタン史の出発点「平戸・生月地区」、日本の近代化と共に教会堂がある「佐世保・松浦地区」、日本最初のキリシタン領主の舞台「大村・西海・外海地区」、流転の半島「島原・天草地区」、移住者が信仰を守り継いだ「五島地区」、受難と復活の舞台「長崎地区」の大きく6つの地区巡礼があります。

この長崎巡礼をすることで、

- ①日本のキリスト教の歴史を知ることができま
- ②キリシタン時代からの西洋との窓口で生まれ
- ③250年間、密かに信仰を守りつづけ、奇跡的
- ④それぞれの地で未来へのメッセージを受け取り、それを発信することもできます。



ルイス・デ・アルメイダ記念碑(春徳寺)

【心触れ合う出会いを・・・】

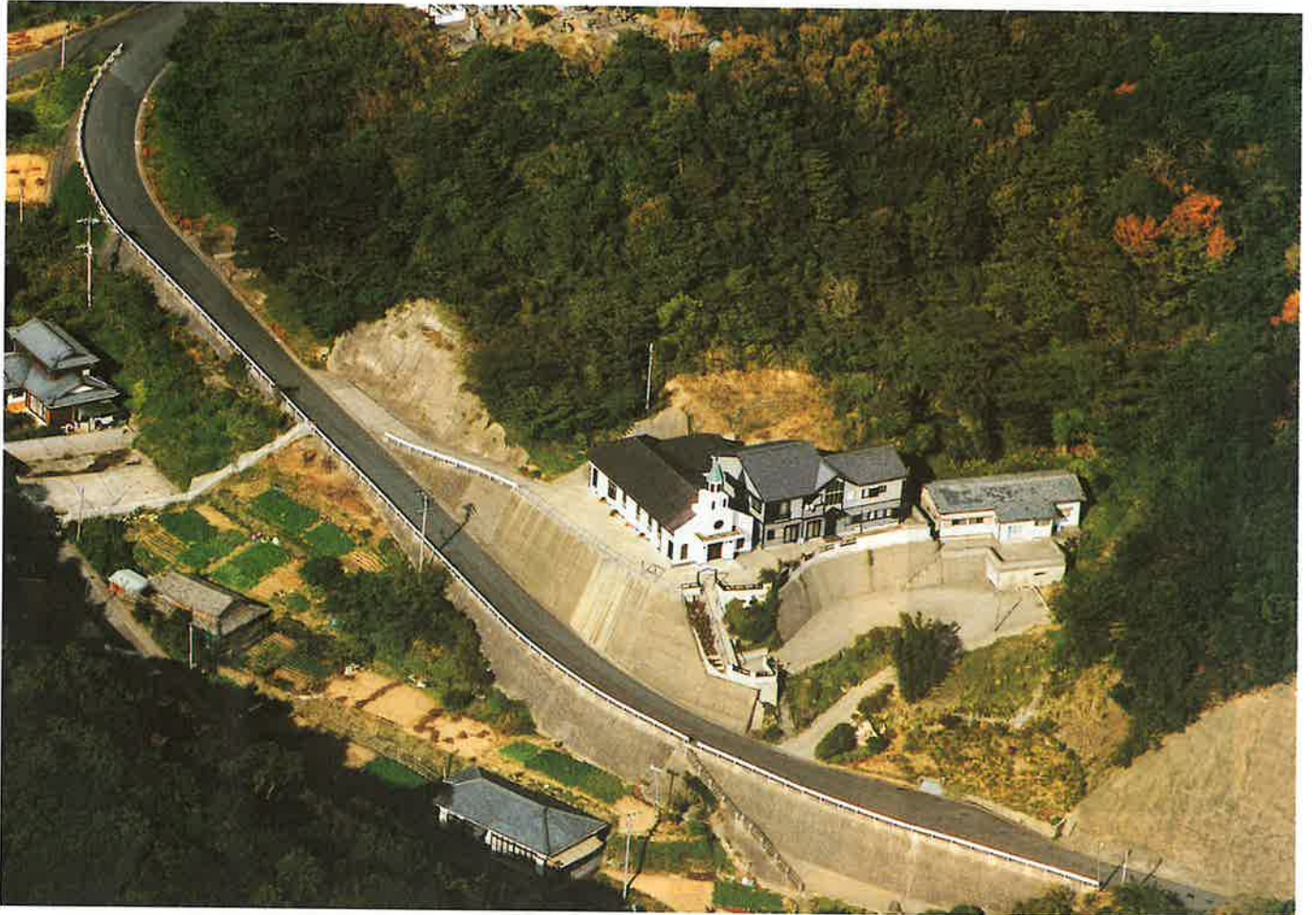
私は、信者ではありませんが、長崎巡礼センターのスタッフの一員です。かつては教会堂の形のみに関心をもっていました。あるとき江袋教会を訪れ、前をウロウロしていた私を一人の信徒さんが快く招き入れてくださいました。勝手に入るのではなく、教会に受け入れられた気持ちで中に入って、それまでと違う何かを感じました。私が見学をしているとき、その信徒さんは静かに座っておられました。夕方のお祈りの時間だったので。感謝の気持ちを伝え、安らかな気持ちで外に出てきました。信徒さんが、長崎のキリシタン史の担い手の子孫であること、「敬度な」という言葉の重さを知るのは、最近になってですが、私はそのときに、心に響く長崎巡礼をした最初だったと思っています。

5月25日に開設した長崎巡礼センターは、宗教の垣根を越え、広く世界の人々に真の長崎を知っていただくために、長崎巡礼に関する情報発信・受信をおこなっていくサポート機関です。巡礼者の出合いの場となり、上質な巡礼へとつながる拠点となるよう、私も自分の体験を生かしながら、長崎巡礼を希望する方々のお手伝いをさせていただきます。

世界が宝として認めつつある長崎の殉教地や教会堂めぐりが、人々の心の交流と出会いを重ねながら「新たな旅文化」の創生につながるものとなればと願っています。

犬塚明子（長崎巡礼センタースタッフ）

生活教会 の中の



土井の浦教会

フォトプラン 山本 富夫

五十年

若松大橋を渡り暫く進むと、小高い丘に土井の浦教会堂がある。

最初の教会堂は一九一五年、旧大曾教会堂を買受け建立。その後、外壁などを改修したが、数十年して老朽化。一九九八年、現教会堂を献堂。

小教区は、当初桐に属していたが一九五八年独立。大平、有福の二つの巡回教会を持つ。

白崎にはクリシタン湾洞があり、弾圧を逃れ隠れた往時を偲ぼせる。

湾洞に四十年前に建立されたキリスト像は、右手を上げ、そこを行き交う人々を祝福している。